

被害シナリオ作成の考え方について

- 1 被害シナリオの概要
- 2 被害シナリオの作成方法
- 3 シナリオ作成の区分と活用のイメージ
- 4 地域区分の例
- 5 複合災害のシナリオについて

1 被害シナリオの概要

(1) 被害シナリオとは

- 地震の被害シナリオとは、特定の地震が発生した場合に**想定される被害の様相と、その後の時間経過に伴う災害対応の推移をまとめたもの**。
- 地震による建物倒壊や火災、土砂崩れなどの被害状況、避難所開設、救助活動、被災者への支援など、**災害発生後の様々な事態を、時系列に沿って（地震発生直後、数日後、1週間後、1か月後くらいまで）記述**することで、**数値化できない被災後の生活上のリスク**などを把握できるようにするためのもの。

(2) 利用主体

地域住民、事業者、行政機関など（その他、学校、病院など…）

(3) 主な目的

①情報提供:

- 地震が発生した場合の被害状況や対応の目安をわかりやすく伝える。

②防災教育:

- 地震への備え（事前対策、発災時の行動）について啓発する。

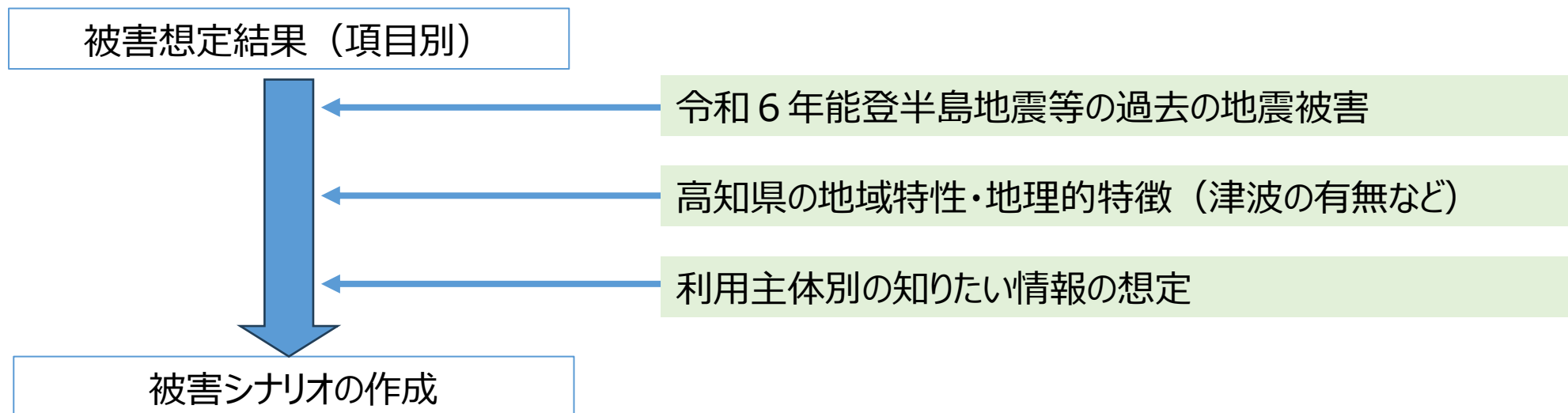
③災害対策の検討:

- 地震発生後の時間経過に伴う応急対策の内容や、そのための業務資源が十分であるかを検討するための資料とする。

2 被害シナリオの作成方法

(1)シナリオ作成の流れ

- 被害想定項目別に、地震発生後から復旧期までを対象に、時間経過ごとの被害様相を整理
- 定量的な被害想定結果のみならず、令和6年能登半島地震等の**過去の地震における被害や高知県の地域特性・地理的特徴などを踏まえて整理**
- シナリオは、それを利用する主体の立場や居住地によって、**知りたい情報（必要な情報）が異なる**と考え、本県の**＜地域特性・地理的特徴別＞**×**＜利用主体別＞**のシナリオを作成



3 シナリオ作成の区分と活用のイメージ

(1) 地域区分

地理的特徴（被害の特徴：津波の有無など）で分ける

⇒沿岸部（津波あり）、内陸部（津波なし）、高知市周辺の3分類

⇒分類もコンパクトになり、被害に即したシナリオ作成ができる。

(2) 利用主体の区分

地域区分ごとに、1本のシナリオにする。

⇒各シナリオには、「住民」「事業者」「行政機関」に役立つ情報を盛り込む

利用主体別のシナリオ活用のイメージ

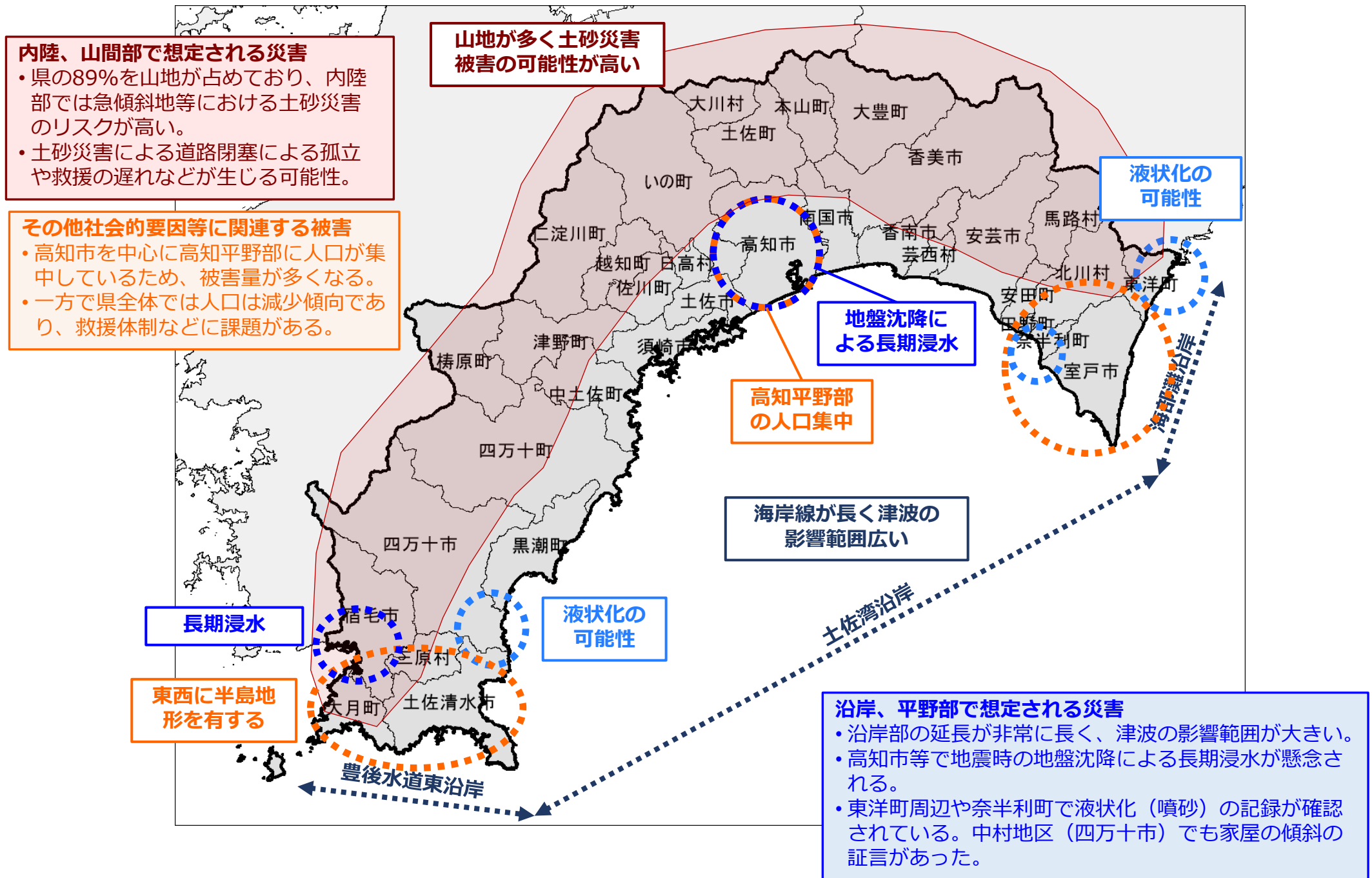
利用主体	シナリオ活用の場面	必要な情報
住民	災害発生時に 自分の生活の中で起きること （危険や被害等）をイメージし、 安全の確保と生活の維持 のために、平常時の 備えや災害発生を想定した行動や訓練 に役立てる。	・揺れの程度や被害 ・津波の程度や被害 ・建物への影響 ・地域の被害 ・人的被害 ・ライフラインの状況 等
事業者 (個人・法人)	災害発生時に、 事業（業務）の現場で起きること （危険や被害等）、またそれらが時間軸の中で どのように変化（回復）するか をイメージし、 事業（業務）継続 のための平常時の 備えや災害発生時を想定した訓練 に役立てる。	（上記に加えて） ・電気の復旧時期 ・通信の状況 ・幹線道路の通行停止箇所と停止解消時期
行政機関	上記2者を支援 するために、災害に伴って発生する状況（危険や被害等）を時間軸に沿ってイメージし、平常時の 備えや災害発生時を想定した訓練 に役立てる。	・必須の行政対応 ・対応上の問題・課題

4 地域区分の例

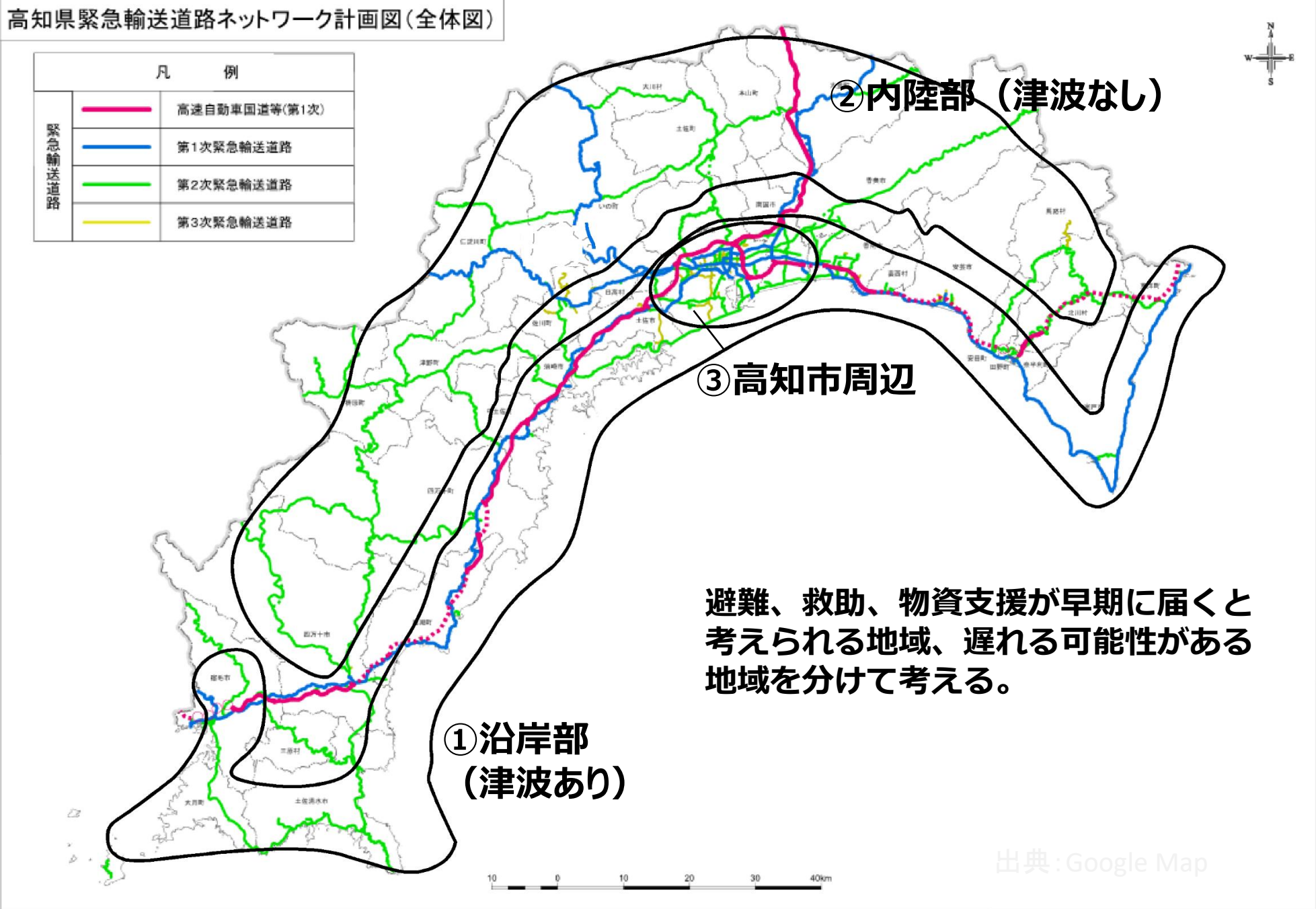


4 地域区分の例

高知県における災害の地域特性



緊急輸送道路の位置関係

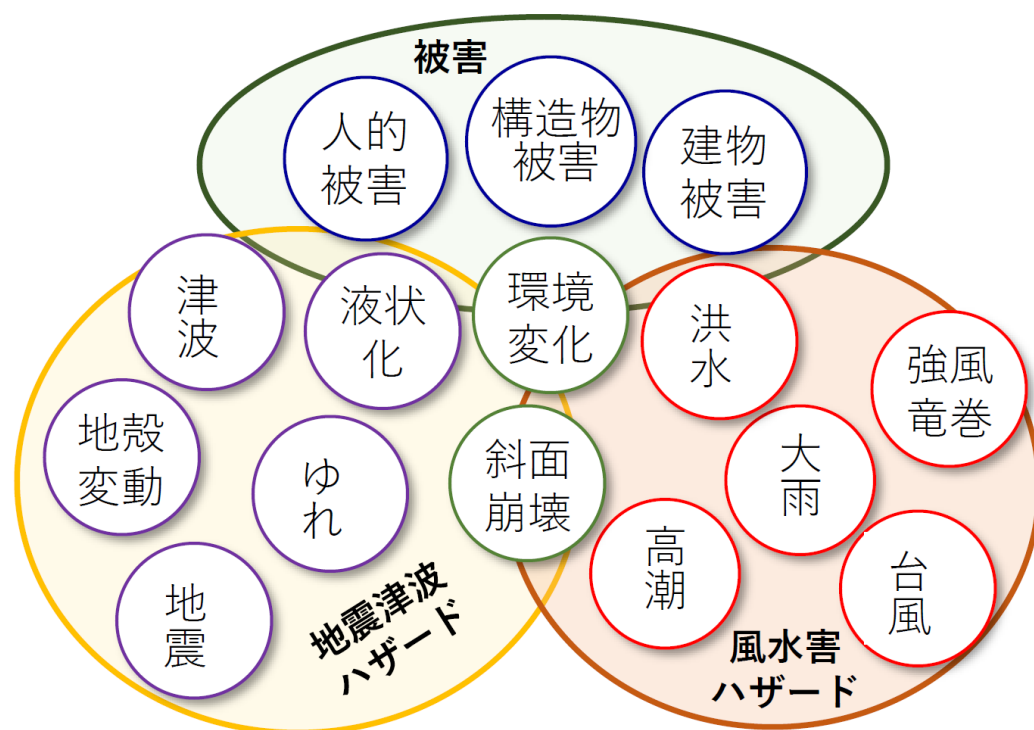


5 複合災害のシナリオについて

複合災害

- 南海トラフ巨大地震発生後に、台風等の襲来による大雨によって被害がさらに増大することが考えられる。
- 関東地震、福井地震、能登半島地震等の被害地震後の暴風雨被害を参考とする。
- 南海トラフ巨大地震の陸側ケースを基本のケースと考え、本格的な復旧がまだ進んでいない数カ月先に大雨が発生することを考え、この時の状況を定性的にまとめる。

【参考】2011年台風第12号及び2018年台風第21号による大雨と暴風、高潮等の被害



南海トラフ地震後の、例えば**数カ月先に、大規模な風水害で被災**することも、可能性としては、考えられる。

このような、**さらに厳しい被害**についてもシナリオを検討しておく。